ロシア語アスペクト論の諸問題

栗原成郎

ソ連アカデミア版『ロシア文法』（1980）を最近の頂点とするロシア語動詞のアスペクトの研究の現段階において，なお論点として残されている問題に1）アスペクトの定義の方法，2）アスペクトのカテゴリーの性格，3）アスペクトの対（ペア）の組織，4）アスペクトの用法の理論的整理，などの事項がある。小論においては1），2），3）の問題を検討することにする。

I　伝統的な記述文法においては完了体，不完了体にそれぞれポジティヴな定義を与えるのが普通であった。例えば，アカデミア『ロシア語文法』（1960）には次のような記述が見られる：「持続的動作ないし反復的動作を表す動詞は不完了体動詞とよばれる。動作をその実現の瞬間・限界・結果におけるものとして表す動詞は完了体動詞とよばれる」〔1／422〕。

完了体動詞が「完結性」（ законченность，Vollendung ）を表し，不完了体動詞が「持続性」（ длительность，Dauer ）を表すと言うような定義，前者が「点」（・）のようなものとして表象され，後者が「線」（——）のようなものとして表象されると言ったふうな比喩は19世紀以来常識的には支持されてきたものであり，実用的には今日なおかなりの有効性を保持しているが，このように完了体・不完了体の一般的な意味を，両者それぞれ，ポジティヴに特徴づける定義や比喻は，完了体動詞で「持続性」を表すものもあり（例えば，посидеть〝しばらくいる〟），不完了体動詞で「完結性」を表すものもある（例えば，доцветать〝咲き終る〟）など，アスペクトといわゆる「動作相」（ способы действия ）とを峻別し得ない危険性をはらみ，また，アスペクトの一般的な特徴づけにそぐわない用法（例えば，過去において「反復された」動作を表す完了体の用法：Он попробовал несколько раз открыть дверь.　〝彼は何度かドアを開けようとした〟）の説明がうまくつかないなど，理論的に不備であるとされてきた。

動詞のアスペクトの定義は今日に至るまで理論的に重要な問題として議論の余地を残している。現代ではプラハ言語学集団によって提唱された「二項対立」の原理に基づいて，完了体動詞を対立の有標項とし，不完了体動詞を無標項として，アスペクトのカテゴリーを非対称的対立の相関において図式的に把握する立場が支配的であり，完了体動詞のアスペクトの不変的意味を探求することによってアスペクトにまといついている語彙的・脈絡的意味と区別して文法的・構造的意味を抽出し，アスペクトの定義を純粋化する方向がとられている。

プラハ版『ロシア文法』（1979）はアスペクトのカテゴリーを комплексность(целостность)：：некомплексность(нецелостность)の対立に基づくものとしている—。「この対立項のうち有標項は完了体動詞であり，動詞によって表わされる動作の知覚を統合的なもの（ комплексное ）として信号化する。対立の無標項である不完了体動詞の構造的意味は，動作の統合性の特徴に関わりなく表された動作の標示の中に含まれており，そのことによってアスペクトの対立の有標項に比してより広範な機能領域をもつ」〔4／§292〕。

プラハ版『ロシア文法』（1979）は動作の ≪комлексность≫ （統合性）と≪целостность≫（全一性）をシノニマスに用いている。

アスペクトを「動作の全一性」：：「動作の非全一性」という意味的対立に基づいて立てられた

カテゴリーとする定義は，最初チェコスロヴァキアの古典語学者Emil Černýによって提唱され，明確化されたものである。プラハ学派のアスペクト論は伝統的にこの定義に従っているが，この ≪целостность≫ の概念については多少の説明が必要であろう。

Dostálは「動作の全一性」（≪celkové, ucelené pojeti děje≫）の概念に基づく完了体動詞の定義をSaussureから採っている。その古典的名著『一般言語学講義』(1916)においてSaussureは次のように言う：≪Les langues slaves distinguent régulièrement deux aspects du verbe: le perfectif représente l'action dans sa totalité, comme un point, en dehors de tout devenir; l'imperfectif, la montre en train de se faire, et sur la ligne du temps≫「スラヴ語は動詞に二つのアスペクトを規則的に区別する：完了体は動作をひとまとまりの一体において，推移に関わりなく，一点として表示する：不完了体は動作を時間の線の上にあって，生起しつつあるものとして示す」〔11／II，chap IV，§2〕。動作の「全一性」とは≪totalité≫として知覚・表象される動作のことである。Dostál それを≪celkový pohled na vnější událost≫（外的出来事の全体的把握」）と呼んだ〔12／15〕。

Isačenkoはこの動作の「全一性」が話者の視点からなされる統覚であることを強調して，スラヴ語動詞のアスペクトの文法的な意味を次のような比喩を用いて説明している――。

「不完了体によって過程を表す場合には（例，я переписывал　<私は書き直していた>，я переписываю　<私は書き直している>），話し手は，言わば，過程そのものの流れのなかに身を投じている。彼にはその流れの始めも終りも見えない，したがって，彼はこの過程をまとまりのある単一な出来事として表現し得ない。この場合の話し手の視点はメーデーのパレードの参加者の視点に比べることができる。パレードの参加者は群集とともに動き，行進の始めも終りも見えない。

完了体によって過程を表す場合には（例，я переписал　<私は書き直した>），話し手は，動詞の形態によって表された過程の外側に立っている。したがって，彼は過程を単一な総体として概観する。この場合の話し手の視点は，メーデーのパレードのとき，高い演壇の上に立っている人の視点に似ている。つまり，彼には行進の始めも終りも見えるので，行進は彼に全体的な印象を与える」〔6／132－133〕。

Isačenkoは，さらに，現実の過程に対するこの二つの態度を次のように図式的に示している。

不完了体：　―――――――― × ――――――――

話し手

（言わば，過程そのもののなかにある）

完了体：　$\underbrace{\text{――――――――――――――――――――}}$

×

話し手

（言わば，過程の外にあって，全貌を概観する）

ここで強調されているのは，完了体に固有な動作・過程の全一性であり，全貌把握的視点から生ずる統覚である。

「動作の全一性」（≪целостность действия≫ はすべての完了体動詞に固有な抽象的意味特徴と解され，≪целостность≫ には動作の≪комплексность≫（統合性），≪сомкнутость≫（密集性），≪собирательность≫（集合性）等の概念が内包されている〔6／131〕。

Бондарко（1961／1971）も≪неделимая целостность действия≫（「動作の分割し得ない全一性」）を完了体動詞の基本的意味特徴とし，不完了体はその意味特徴の標示をもたないものと定義づけた〔8／31；9／17〕。

主としてプラハ学派が「動作の全一性」を完了体の構造的意味特徴と見ているのに対して，Виноградов の学統のもとにあるソ連の学者たちは「動作の限界性」（≪предельность действия≫）という概念を立てと完了体を定義づけようとしている。

「70年アカデミア文法」は「その限界に到達した動作を表す動詞」を完了体動詞とし，「動作の限界への到達の指示を含まない動詞」を不完体動詞とした〔3／§822〕。

「動作の限界」（≪предел действия≫）の概念の最も抽象的な意味は「内的・質的限界」（≪внутренний качественный предел≫）の意味であり，それは，換言すれば，動作がそこに到達することによって自己を消耗しつくして止まらなければならない一種の「臨界点」（≪критическая точка≫）である〔3／§822；4／§1386〕。

「70年アカデミア文法」の動詞のアスペクトのカテゴリーの項の執筆者である Авилова はその著『動詞のアスペクトと動詞語彙の意味論』（1976）において，Виноградов を援用しつつ，「動作の全一性」の概念で包括し得ない完了体動詞のグループがあること，「動作の全一性」の意味は動詞の語彙的意味にそぐわないことの二点を理由に，この概念の使用を避け，「動作の内的・抽象的限界への到達」（≪достижение внутреннего абстрактного предела действия≫）の意味を完了体の文法的意味と規定している〔10／23〕。

一方においては，アスペクトの定義に際して，動作の「全一性」と「限界性」の二つの概念を共存させようとする試みもある。例えば，Sekaninová は，動詞のアスペクトの定義において両者の概念は相互排除的なものではない，と考え，「動作の全一性」という抽象的概念に「動作の限界」というより具象的な概念を補足することを提案した〔13／192－198〕。

Śmiech はその著『現代ポーランド語における動詞のアスペクトの機能』（1971）においてアスペクトの定義の問題を検討し，Dostál のアスペクトの定義が，完了体と不完了体を異なる視点から性格づけようとしたDostál以前の定義に比して，ただ一つの意味特徴をその基礎においていること，完了体動詞のあらゆる偶有的意味特徴をカバーし得ることなどにおいて利点を有することを認め，Dostál の抽出した完了体の意味特徴を自らのアスペクトの定義において活用した。── ≪aspect jest to zdolność czasownika do ujmowania akcji w sposób całościowy z punktu widzenia jakiejś granicy lub w sposób niecałościowy≫「アスペクトは動作をある限界の視点から全一的なものとして表すかあるいは非全一的なものとして表す動詞の能力である」〔14／9〕。これがŚmiech によるアスペクトの定義であるが，彼は「限界」（≪granica≫）という概念を自ら，脚注に記しているように「60年版アカデミア文法」（т.1.стр.424）から得て定義に導入している。これも動作の「全一性」という概念と「限界」という概念を両立させようとする試みの一つである。

そのような折衷的な態度は最新の「80年版アカデミア文法」のアスペクトの定義にも見られる——。「アスペクトのカテゴリーは，限界づけられた全一的な動作（ограниченное пределом целостное действие ）を表す動詞形態の系列（完了体動詞）と限界づけられた全一的な動作という特徴をもたない動詞形態の系列（不完了体動詞）の，相互に対立する二系列の動詞形態の体系である」〔4／§ 1386〕。この定義につづいて「限界による動作の制約（ограничение действия пределом）とは，持続性ないし反復性におけるプロセスとしての動作の表象と異なって，動作を全一的な行為（ целостный акт ）として表象している抽象的・内的限界による動作の制約を意味する」という説明を付加している。「80年版アカデミア文法」の動詞の形態論のアスペクトのカテゴリーの執筆者は「70年版アカデミア文法」にひきつづいて Авилова であるが，「動詞の一般的性格」と「アスペクトの用法」の項目の執筆担当者は Авилова とは学説を異にする Бондарко であることもあって，見解の統一が時には学説の折衷・妥協の姿勢をとらざるを得なくさせており，記述が歯切れの悪いものになっている欠点は否み得ない。

Dostál が説くところの「動作の全一性」は話者の視点からの統覚によるプロセスの全体性であり，Виноградов の言うところの「動作の限界性」は，言わば，動詞のエネルギーの燃えつきる臨界点であり，両者のあいだには文法概念としての抽象性の度合に差異があるから，両概念の安直な統合によってアスペクトの定義の正確化は期し得ない。

II　アスペクトをどのような性格のカテゴリーと見るかの問題はアスペクトの対の組織の問題と深く関わっている。近年，アスペクトを文法的カテゴリー，すなわち，造語的カテゴリーでも，語彙・文法カテゴリーでもなく，語形変化的カテゴリー（ словоизменительная категория ）とする見解が検討されてきた。 Маслов は「動詞は，時制・法・人称・数に応じて変化（活用）するのと同じように，原則としてアスペクトに応じて変化（活用）する」〔7／4〕と考え，「不完了化」 （≪имперфективация≫） の方法によって形成されるアスペクトの対（ дать － давать，подписать － подписывать のように，完了体動詞から接尾辞法によって不完了体が形成される場合）は同一の語の形態であり，対を形成するための接尾辞はアスペクトの形態素であることを指摘した。Маслов の考えによれば，アスペクトの全カテゴリーは語形変化的カテゴリーであり，подписать－подписывать タイプのアスペクトの対の圏外に立つ動詞はすべて，アスペクトに関しての欠如動詞である，と見なされる。動詞のアスペクトを語形変化のカテゴリーと認めることは， делать － сделать タイプの「完了体化」（≪ перфективация≫） によるアスペクトの対を同一語の語形変化とは認めないことになり，いわゆる ≪чистовидовые приставки≫ （「完了体形成専用接頭辞） の研究の拒否につながる。 делать－сделать，писать－написать タイプの接頭辞で新語派生の現実的な意味が稀薄化して，不完了体の動詞からアスペクト的対となる同一語彙の完了体形成の機能のみを残しているもの（≪les préverbes vides ≫）の存在は Виноградов によって原理的に可能と認められており，それらの記述を避けることはできない〔1／421－424〕。Маслов の見解には Isačenko，Бондарко，Молошная 等賛同者も多く，アスペクトを語形変化のカテゴリーと見る立場に立てば，アスペクトの文法的性格が強調され，その表現手段は機械的に単純なものとして現れるために，考察が容易になり，記述が正確になるという利点がある。しかしその反面，その記述に用いられるモデルは完璧とは言いがたく，動詞のアスペクト

の形態論的表現手段のすべてを網羅し得ない恨みがある。

Авилова はアスペクトを語形変化的カテゴリーとする立場を認めない。「70年版アカデミア文法」において彼女は「同一語の異なる形態の対立によってではなくて，異なる語の対立によって形成されるアスペクトのカテゴリーは特別な性質の文法カテゴリーである。すなわち，それは語彙・文法的（類別的）カテゴリーである」〔3／§827〕と記している。アスペクトのカテゴリーの相関関係にある文法的意味は，それぞれ，独立の語彙としての動詞全体に備わったものとされる〔10／41〕。

「80年版アカデミア文法」においてもアスペクトの対は異なる動詞の対立と考えられており，アスペクトのカテゴリーを語形変化的カテゴリーとする立場はとられていない。

≪ имперфективация ≫（不完了体化）がその形成法において高い規則性・画一性をもつこと，アスペクトの対の大部分において動詞の語彙的意義の安定した同一性をもつことによって ≪перфективация≫ とレベルを異にしていることは指摘されているが，「 имперфективация が動詞の時制形の形成や名詞の格形態の形成と同じような絶対的規則性をもって実現する，と言うことはできない」と述べられている〔4／§1397〕。

Авилова によれば，「不完了体化」も「完了体化」も，同様に，造語法の過程である〔10／158〕。彼女の立場に立てば，アスペクトの対は，不完了体化によるにせよ，完了体化によるにせよ，すべて異なる語の対立であるから，もともと文法性の低い「完了体形成専用接頭辞」を認めなくても，理論的には矛盾はない。< делать – сделать >タイプの接頭辞法によるアスペクトの対は語彙的に同一であるものもあるが，そのような不完了体動詞との対を成す完了体動詞の接頭辞は，対を形成する機能をもつと同時に，限界性の意味に近い結果性の意味を動詞に持ちこみ得る。「完全に文法化された接頭辞はロシア語にはひとつもない」〔3／§825，830〕とされる。

「80年アカデミア文法」は，不完了体動詞からそのアスペクトの対として対応する完了体動詞を形成するためにのみ用いられる接頭辞（≪чистовидовые префиксы≫）をかなり大幅に認めている〔4／§1394，1395〕。それらのなかには標準的なロシア語国語辞典においては同一の動詞語彙のアスペクトの対とは認められていないもの（すなわち，別見出し語として扱われているもの）も含まれている。例として，Ожегов の『ロシア語辞典』ではアスペクトの対とされていないのに，「80年文法」がそれと認めているものを若干あげておこう：
кормить – выкормить,мужать – возмужать, лечить – вылечить(больного),мерить – измерить,лицевать – облицевать, шутить – пошутить, считать – подсчитать.

次に，接尾辞法について言えば，接頭辞付完了体動詞を接尾辞 -ива- / -ва- / -а- によって不完了体化するいわゆる≪вторичная имперфективация≫（第二次不完了体化）（ писать – переписать – переписывать タイプのもの）が文法的形成に近い規則性と語彙的意義の不変性を保持していることにはほとんど議論の余地はない。接尾辞法に関して「70年文法」と「80年文法」のあいだで扱い方に変化が見られるのは-ну- に関してである。接尾辞 -ива / -ва- / -а- は起源的には「多回性」を表示する「動作相」（способы действия ）の造語的手段であった場合もあるが，現在の共時態においては，文法化され，不完了体形成の形態手段である。それと同様に，接尾辞-ну- は，ある種の場合は，本来の「一回性」の動作相の意味が摩滅して完了体形成用の形態手段となっていると見なし得ないか，という問題が考えられる。「70年文法」は，прыгать – прыгнуть，сверкать –

сверкнуть, дуть - дунуть, полосовать - полоснуть, плевать - плюнуть, колоть - кольнуть, трясти - тряхнуть, скользить - скользнуть, скрипеть - скрипнуть, кричать - крикнуть 等を，事実上は，アスペクトの対を成すものとして認めた〔3／§831〕。「80年文法」は一転して，-ну- は，すべて，完了体形成のための専用接尾辞とは認めず，「一回性」の動作相のための造語的手段としてのみ扱っている。これによって，理論的処理としてはアスペクトと動作相との記述レベルの相異が明確化され，成功している，と言ってよい。

＜参　考　文　献＞

(1) Виноградов В.В. Русский язык. Грамматическое учение о слове. М.-Л., 1947. М., 1972[2].
(2) ≪Грамматика русского языка≫. т.I. Изд. 2-е. М., Изд-во АН СССР, 1960.
(3) ≪Грамматика современного русского литературного языка≫. М., ≪Наука≫, 1970.
(4) ≪Русская грамматика≫. т.I. М., ≪Наука≫, 1980.
(5) ≪Русская грамматика≫. т.I. Academia, Praha. 1979.
(6) Исаченко А.В. Грамматический строй русского языка в сопоставлении с словацким. Морфология. II. Братислава, 1960.
(7) Маслов Ю.С. Морфология глагольного вида в современном болгарском литературном языке. М.-Л., 1963.
(8) Бондарко А.В. и Буланин Л.Л. Русский глагол. Л., 1967.
(9) Бондарко А.В. Вид и время русского глагола. М., 1971.
(10) Авилова Н.С. Вид глагола и семантика глагольного слова. М., 1976.
(11) de Sanssure F. Cours lingnistique générale. Paris, 1916, 1955.
(12) Dostál A. Studie o vidovém systému v staroslověnštině, Praha, 1954.
(13) Sekaninová E. Nové pohl'ady na kategóriu slovesného vidu. - Jazykovedný časopis, R. XXIII, 1972, N2, s. 192-198.
(14) Śmiech W. Funkcje aspektów czasownikowych we współczesnym języku ogólnopolskim. Łódź, 1967.